

サイクリングロードの中のダイバーシティ

文

茨城大学工学部 都市システム工学科
教授 工学博士

金 利昭

一般社団法人 日本シェアサイクル協会
事務局：TEL 03-3663-6281
URL <http://www.gia-jsca.net>



3年前にガウディのサグラダ・ファミリアを見にスペイン・バルセロナへ行った。旧市街地にある観光名所カタルーニャ音楽堂を巡った時、我々ツアー客はバスを降りてぞろぞろ歩いていたのだが、外国人観光客は自転車で回っていたことを思い出す。

私は水戸市の偕楽園・千波公園の近くに住み、気候の良いこれからの季節は朝早く公園内や河川堤防の「サイクリングロード」をサイクリングしている。近年では、出張に行く先々でシェアサイクルやレンタサイクルを利用することが多いし、無料で貸してくれるホテルを探すことも多くなってきた。こうしてみると、確かに自転車は手軽で便利な乗り物だし、乗っていて楽しい。

私は今まで「都市交通としての自転車」をターゲットにして、主として日常生活空間の道路整備をテーマにしてきたが、レジャー交通としての自転車やサイクリング(ロード)は、これからの課題だと思っている。

わが国では一般的に大規模自転車道や自転車専用道路、河川敷、堤防上などに設置された通路をサイクリングロードと呼んでいる。大規模自転車道は自然公園、名勝、観光施設、レクリエーション施設等を結び、国民の心身の健全な発達に資することを目的とし整備された。1973年度に4275kmのネットワークが計画され、2009年度までに135路線3529kmが供用されているという。一方、河川敷や堤防上は自動車や原動機付自転車の通行が禁じられていることから、サイクリングロードとして利用されることが多い。しかし、サイクリングロード(自転車の通路)と呼ばれているものの、自転車だけではなく歩行者の通行も認めている場所がほとんどである。例えば、1987年に廃線となった筑波鉄道跡地を利用してできた茨城県の土浦駅～岩瀬駅間を走る

「つくばりんりんロード」は、これこそ自転車専用道路だと思っていたら、実は自転車歩行者道であり、利用者は子供から大人までのスポーツサイクルから買い物帰りのママチャリ、そしてウォーキング、ランニングにまで使われている。

近年の健康志向の高まりを背景にサイクリングだけでなくウォーキングやジョギング・ランニングを楽しむ人が増加しているが、問題はこうしたレジャー活動を目的とした自転車や歩行者の活動場所が、通称サイクリングロードと呼ばれる公園や河川・湖沼の堤防上であることだ。要するに、我々が問題視してきた自転車歩行者道での歩行者と自転車の混在問題が、もっと本質的な問題として起こっている。

河川敷は河川管理用道路であり国・県・市等が管理を行っているが、区域を決めて分担管理しているところが多く、管理者が複雑である。一方の管理者がサイクリングロードと認定していても、他方は認定しないなど、管理上の連続性がない。また名称はサイクリングロードとしてレクリエーションやスポーツとして利用する自転車通行を主な対象としていても「歩行者も通行することができる」とし、歩行者の多い場所での注意喚起にとどまっている場所も多い。

ウォーカー・ランナー・サイクリスト等のレジャー活動は、その目的が気分転換や散歩、トレーニングなど様々であるため、交通の円滑化や利便性の向上が重視されている都市交通とは活動の本質が異なる。子供を挟んで家族三人で楽しく散歩をするのは当然だし、その子供が道路端にある花畑の蝶を追いかけることは微笑ましい。しかしスポーツサイクルにとっては迷惑である

に違いはない。多様な利用者が混在する空間では互いの目的を阻害し合う結果になりかねない。ここで多様な利用者の行動パターンを観察した結果として、次のようなものを挙げることができる。追い越し、並走、すれ違い、蛇行、イヤホン装着、通行帯侵入、立ち止まり、縦列走行、右回り左回り周回、ながら移動、写真撮影、犬連れ。

このようにサイクリングロードでは多様な目的の自転車・歩行者が混在していることから、事故もあり、自転車の速度、マナーに関する苦情も報告されているようである。2009年には多摩川サイクリングロードで帰宅中の歩行者に自転車が追突して歩行者は死亡、2013年には神奈川県開成町のサイクリングロードで自転車が路面の凹凸に引っかかり転倒して死亡しているという。

歩行者の後ろに自転車がある場合に、自転車はどのようにすればよいのだろうか。また歩行者は自転車にどのようにして欲しいのだろうか。後ろをついてきて欲しいのか追い越して欲しいのか。これを身近な混在道路で調査してみた。自転車が歩行者を追い越す場合に、自転車利用者では「何もせずに追い越す」「自然に気付くのを待つ」等のコミュニケーションを伴わない追い越し・行動が半数を超える。その理由は「歩行者にとって安全」「歩行者を驚かせたくない」である。一方歩行者は「ベルを鳴らしてほしい」「声をかけてほしい」といったコミュニケーションを伴う追い越しを欲している割合が7割程度となる。この理由は「急に自転車が現れると驚くから」が多い。特に高齢歩行者の多くは追い越しの際にはコミュニケーションがあることを望んでいる。交通当事者のコミュニケーションギャップが顕著に出ている事例だと思う。

ダイバーシティ（多様性）がこれからの日本のキーワードになっている。サイクリングやウォーキング、ジョギング、ランニング等のレジャー活動は、人も活動目的も行動も多様であり、その活動場である公園や河川敷等の「サイクリングロード」もダイバーシティそのものといえる。ここでの空間の作り方と利用方法（ルール・マナー）、つまり共存の思想と方法は、まさにダイバーシティを突き進むこれからの日本の姿勢が問われていると思う。

PP



千波湖の周回路
(子連れサイクリング)



千波湖の周回路
(立ち止まって道草)



つくばりんりんロード
(買い物帰りのママチャリ)



つくばりんりんロード
(ウォーキング)